現代社会と「コマーシャル」

——カート・ヴォネガット・ジュニアの現代社会批判——

平林信之

The Modern Society and 'Commercials'

—The Critique of The Modern Society by Kurt Vonnegut, Jr.—

Nobuyuki HIRABAYASHI

Abstract

Kurt Vonnegut, Jr. is, as Graham Greene declared, is one of the best living American writers. This does not always mean that he is a good storyteller, but that he is a good critic of the modern society. His stories include a lot of satirical commentaries on business,war, politics, and machine technology, which expose the foibles and inhumanities of the modern society.

The modern society is built on the great progress of science, and the progress has certainly proved of great benefit to us. But at the same time we cannot help admitting that it has been attended by many evils; it has helped the establishment of mass culture. Mass culture is based on massification which brings standardized behavior patterns to people as robots have. Commercials play an important role in the massification. Through commercials, enterprises can control the masses. Vonnegut does not use the term 'commercials' only in its narrow sense. In mass democracy the persons in power control the masses by means of commercials. Vonnegut thinks that the culture, which has passed for a culture in his head, is really junk, that is, a bunch of commercials, and that it is intolerable to him.

He is going to criticize the modern society by examining them in his stories, and the examination is showed in this paper.

1. 現代社会とヴォネガット

1950年代後半から60年代にかけて，アメリカ小説界には新しいタイプの作家たちが登場する。Kurt Vonnegut, Jr. (1922～) もその一人である。これらの作家には，共通の時代精神とも言うべきものが流れている。それは彼らの作品に現われる現代社会に対する批判としての激しいニヒリズムである。このような作品の出現とその人気は，現代文明の最先端を行くアメリカ社会のかかえる矛盾と無関係ではないように思われる。

1963年にケネディ大統領が暗殺されて以後，夏毎の黒人暴動，50年代後半に介入したベトナム戦争における北爆開始と戦争拡大，反戦運動，麻薬，ヒッピー，性の自由化，学園紛争，キング牧師およびケネディ上院議員の暗殺，公害，宇宙競争などを通じてさまざまな矛盾が現われる。

自由と民主主義の国であるはずのアメリカにおいて，なぜこのような暗殺や暴動が続発するのか。自由と民主々義を守る聖戦と北爆は，さらにさかのぼれば，原子爆弾の投下，ドレスデンの大空襲は，矛盾しないのか。「戦争中にしたことについて，良心のとがめを感じているなんてだいたい他に聞いたこともない[1)]」のはなぜか。科学的真理の発見と科学技術の進歩を象徴する宇宙競争はどんな意味があるのか。広告やボードビル劇場の曲芸みたいなものにすぎないのでないのか。科学的真理の発見と科学技術の進歩は全面的に人類に利益をもたらすのか。「学者が研究するものものなんか，皆結局兵器になる[2)]」のではないか。現に，科学的真理なるものは，広島に落され，ドレスデン，ベトナムに落され，排気ガス

昭和55年9月30日受理

となってぜんそくを引き起こしているではないか。その結果，人類を，あるいは地球そのものを破滅に追い込みつゝあるのではないか。そして，人々はこうした問題から目をそらされてきたのではないか。このようにして，現代において絶対的な価値を有すると見なされるものに対する不信と幻滅が生まれる。

このような背景のもとに正反対の方向の作品が生まれた。一方は現代社会をリアリスティクにえがくことによってこれを客観的に認識しようとする作品であり，また一方はリアリズムに訣別し，ファンタジーやSFスタイルや徹底的戯画化によって明確な虚構の世界を作り上げ，寓意によって作者のメッセージを伝えようとする作品である。ヴォネガットの主要作品の多くが後者に属する。

ヴォネガットは，1952年にPlayer Pianoを書いて以来，不本意なSF作家というレッテルをはられたが，またその後もSF的手法を用いて現代社会の批判と諷刺を展開することになる。彼はSF作家とリアリズム作家についてこう書いている。「エリオットによれば，SF作家は詩人なのだ。なぜなら，彼らは，上手に文章を書くどんな人よりも，重要な変化に対して敏感だからである。『才能があってもすずめの屁のようなやつらなんかくそくらえだ。宇宙や無限の時間やこれから生まれるなん億兆という人間が問題になっている時に，たった一人の人生のちっちゃな一部をきめ細かに書くやつなんて，ね』。[3]」実際，「SF作家たちの根本原理である宇宙のスケール，幾億年のスケールにおいて考える，人間についての考え方が，もっともよく今日の人類の全体についての思考に適合するように感じられることがしばしば[4]」だ。この意味で，彼のSF的手法は，彼の関心（地球的あるいは宇宙的規模での現代文明の方向）と合致する。また，彼の作品に見られるSF的要素（「勝手な歴史，擬示歴史の面[5]」）や寓話的要素，徹底的戯画化は，現実との間に距離を置き，問題を客観的に乾いた目で見つめることを可能にする。

そして，彼は作品中にこう書いている。「人間について知るべきことは，すべてフェドル・ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』に書かれている，と彼は言った。そしてこうつけ加えた，『だが，それだけじゃ十分ではないんだ[6]』。」この言葉には，現代文明の方向に関する警告を伝えたい，しかも，そのためにはリアリズム小説ではだめなんだ，というヴォネガット自身の一種切迫した感じがにじみ出ている。そのようなヴォネガットの警告の決定版とも言うべきものがSlaughterhouse-Five (1969) とBreakfast of Champions (1973)（以下『朝食』と略記）と思われる。前者はハードカバー版で売れ行きのよかった最初の本であり，リテラリー・ギルドの第二推薦図書の一つに入り，後者はリテラリー・ギルドとサタデー・レヴュー・ブッククラブとブック・ファンド・クラブの第一推薦図書にえらばれた。また，ヴォネガット自身，前者を書き終えた後，「もうこれ以上全然書く必要はないと感じた[7]」と述べている。さらに，この二作品はもともとひとつの作品だったのだが，水と油のように簡単にはとけ合わないので上澄みを移したのが前者であり，あとに残ったのが『朝食』だ，と言う。すなわち，『朝食』はヴォネガットの思想や論理を直接に表わすといった感じが強いもので，前者はそれを土台にした比較的ストーリー色の強いものということであろう。その意味で，彼の作品を読むうえで基礎になり，彼の現代社会批判の総決算的意味を持つものが，『朝食』であると言ってよい。

『朝食』で彼が言いたいことはなにか。それは，彼の「頭のなかでひとつの文化として通用してきたのは，実はコマーシャルの群にすぎない[8]」ということだ。これまで大切にしてきたが今や彼が不信と幻滅を感じているもの，すなわち，現代社会の自由，民主々義，それらを守ると称する戦争，科学的真理や進歩した科学技術，その結果として大量に流れる物資や情報等，はコマーシャルの群にすぎない，と言うのである。彼はそれががまんならないわけで，彼の著書のすべてがこの問題をテーマにしているのである。そして，『朝食』において，このにせ文化であるがらくたを批判することによって，それを頭の中から一掃しようというのである。すなわち，「したがって，この本は，わたしが時間をさかのぼり，50年前の1922年11月1日（彼の誕生日）へ旅しながら肩ごしに投げすてたがらくたのばらまかれた歩道なのだ。」そして，彼は「その後に文化を詰めこみたい」と言う。レヴイ・ストロースによれば，文化とは「人間にやがてかれらが死ぬことを意識するその意識への反作用として存在する[9]。」ヴォネガットの言う文化もこれと一致して，「それなしにはもはや生きて行くことができない」ものであり，「均整のとれたもの」「(人間の) 生と調和する[10]」ものである。さらに，彼は「文化の相対性[11]」を強調する。「小学校一年生になったら，自分の国の文化は理性がでっち上げたものではないこと，ほかにもなん千という文化があって，みんなかなりうまくいっていること，どんな文化も真理よりはむしろ信念にもとづいて機能していること，われわれ自身の社会にとっ

ても選択の余地がたくさんあること，を理解すべきなのだ[12]。」文化というものは，世界中の人々がそれぞれ固有のものを持ち，他をすべて否定する絶対唯一の文化などはない。また，科学的真理は文化の基礎とは限らない。ところが，科学的真理しか認めず，頭でつかちで，人間疎外の進んだ現代文明社会の典型であるアメリカに，現代人は文化を見る。そして，アメリカへの移民たちは「この国に渡ってきたとき，みんな自分の文化をすててしまった[13]。」そして，そのあとにつめ込まれたのが，がらくた，つまりコマーシャルの群なのである。このコマーシャルの群とは，ヴォネガットによれば反文化的なものであるから，彼の言葉を裏がえすと，基本的には，人間の生と調和しないもの，ということになろう。彼は，『朝食』によってこれを頭の中から一掃しようとしており，さらにこのことは大部分の白人アメリカ人および彼らを模倣する白人でないアメリカ人がすべきことではないか，と勧めている。欧米をモデルとして近代化を急ぎ，現在もアメリカ文化にとり囲まれているわれわれ日本人もこの勧めには無関心ではいられない。

今，ヴォネガットの言うコマーシャルを，簡単に，人間の生と調和しないもの，と定義した。しかし，『朝食』全体から見て，また，コマーシャルを伝達する現代の媒体を考慮し，再度，彼の言うコマーシャルについて考えておきたい。『朝食』の主題が，コマーシャルの一掃，にあるとするなら，ここで彼の言うコマーシャルは狭義の商業放送に限定されないようだ。もっと広くコマーシャル的な性格を持つもの，すなわち，マス・メディア，官公庁などの現代巨大機関組織，その他あらゆる媒体や機会を通じて，大量に一方的かつ画一的に伝達され，一見被伝達者に有益のようにみえながら，伝達者の利益や考えを優先し，時には真実を隠し，時には人間の生と調和しない可能性のあるもの，を彼はコマーシャルと言っていると考えられる。(以下，狭義のコマーシャルも含めてこの意味で「コマーシャル」と書き，狭義の商業放送は，コマーシャル，と書くことにする。) 例えば，今日，政府の主張や施策についても放送や新聞を通じて知るのが普通であり，これも「コマーシャル」の一種と考えてよかろう。

以下，「コマーシャル」がもたらす，とヴォネガットが考える現代社会の矛盾を『朝食』を中心に検討し，この矛盾を克服する道についても，彼がどのように考えるか，その点についても言及したい。

なお，ヴォネガットによる問題提起は，直接的には現代アメリカ社会に関して，である。しかし，先に見たように，彼自身，問題は宇宙である，としており，問題はアメリカのみに限られていないことは明らかだ。すなわち，彼の提起した問題は現代社会全体にかかわる問題として以下考えていきたい。

ここで，『朝食』のあらましを述べると，これは，ヴォネガットの分身とも考えられるSF作家 Kilgore Trout と大富豪の実業家で発狂しかけている Dwayne Hoover の出会いの物語である。ニューヨーク州の町に住むトラウトは，ドウェインの住むミッドランド市で開催される芸術祭への招待状を受け取る。彼はヒッチハイクでニューヨーク市や自然破壊の著しいウェスト・ヴァジニア州などを通り，ミッドランド市のドライヴ・インへ着き，ドウェインに出会う。発狂したドウェインは，そこでトラウトを含めて登場人物たちを傷つける。作者のヴォネガットも登場し，そのようすを見ている。ただそれだけのプロットで，ドラマチックな展開はまったくないし，登場人物たちの性格や心理の細かな描写があるわけでもない。トラウトの章とドウェインの章がほぼ交互に現われる。トラウトの場合，主としてミッドランド市への旅の途中で通過した場所や見たもの，起ったこと，会った人物，などの描写，その人物たちとの会話などを比較的短かいパラグラフに区切ってつなげてゆく。これらのパラグラフの多くが，現代社会批判という関連性を除けば，普通の物語の場合のような相互の必然的な関連があまりなく，ちょうど尻取り遊びのように，事柄，物，人物，共通の語，など媒介にして次々とつながって行く。ドウェインの場合も，彼の発狂の過程での身辺のできごと，彼の会社の従業員たち，出かけた場所，などについてやはり短かいパラグラフが同様につながって行く。そして，これらのあちこちに地球以外の惑星や星人の登場するトラウトの作品が紹介される。

2. 現代社会と「コマーシャル」

(1) 科学技術に関連して

ヴォネガットが『朝食』の中でかなり力を集中しているのは，科学技術の進歩に伴う諸問題である。科学的真理の発見，科学技術の進歩は，絶対的価値を持つものとして近代社会を形成してきた。科学者たちは「ただ真理を発掘しているだけであり，その真理は人間を傷つけることは決してありえない[14]」と考えた。もちろん，さまざまな問題の噴出によって，一般的には，そのプラス面と表裏する人間疎外という現代社会の矛盾を生み出していることにわれわれは気づいている。しかし，依然として，工場汚水は流され続け，自動車の排気ガスは多量に

はき出され続ける。

自動車社会に住む者として，ヴォネガットの自動車に関する発言は多い。アメリカのみならず，現代は自動車文化の時代と呼ばれるが，実際のところ，すべての自動車（特に乗用車）は，必ずしも，公害をばらまきながら走らなければならないほど生活必需品というわけではない。にもかかわらず，われわれは自動車を買う。われわれは必ずしも必需品として自動車を買うわけではないからだ。ドウェインによれば，彼が自動車の販売店を始めた頃は，自動車は学校の先生たちやおばあさまたちやオールドミスのおばさまたち用の常識的な乗り物だった，しかし，今や自動車は生活から刺激を求める人々のための魅力的な若々しい冒険となってしまった，のである。乗用車のコマーシャルは，今やこうしたイメージを作り上げ，そのイメージを固定するのに力を貸しているように思われる。なぜなら，現在，乗用車のコマーシャルは，スタイル，内装の豪華さ，スピード，名称のスマートさ，などを競い，排気ガスの毒性の少なさなどまったくない問題にしない。過去においても，1974年当時，マスキー法実施の意志はアメリカのビッグスリーにも日本のトップ二社にもまったくなかった。そして，この傾向は現在も続いているように思われる。このような自動車文化をつくり上げる発端は，自動車の大衆商品化，すなわち量産商品化である。トラウトを便乗させたトラックの運転手は言う。「地球は大規模製造工程（manufacturing process）によって破壊されつゝある。概して，大規模製造されているものはろくなものじゃないこと，これが問題の核心だ。」そして，大量生産されれば，なんとしても製品を売りさばくため，そのろくでもなさは隠して，コマーシャルに懸命にならざるをえない。こうして，自動車は，その繁殖を妨げるもののない生物のようにふえ続け，排気ガスをまき散らし，資源をくい荒らし続ける。トラウトはこのような自動車の物語「車輪つき疫病」を書いた。これは死滅しかけている Lingo-Three という惑星の物語である。この星の生物はアメリカの自動車の姿と似ている。車輪がついていて，燃焼機関で動き，化学燃料を食物とし，卵生で赤ん坊は大人のクランクケースから排出されたエンジンオイルの中で成熟する。この生物は，大気を含めた自分たちの星の資源を全滅させ，絶滅しかけているのである。この物語は，この生物だけでなく，もちろんわれわれ地球人の絶滅をも暗示しているわけである。

ニューヨークを出発したトラウトは，トラックに便乗して旅を続ける。トラックは，ニュー・ジャージー州の汚染した湿地帯を通っている。運転手は，むかし猟師や漁夫だったと言い，湿地帯の汚染をなげいてみせる。しかし，気がついてみると，彼自身の運転するトラックも大気を毒ガスに変えつゝあるのだ。その上，彼のトラックがどこへでも行けるように地球の舗装化が進んでいる。自動車の増加は，巨大な「アスファルト砂漠」を国中に作らせているのである。自動車はさまざまな派生的な自然破壊をもたらして行く。運転手同様，われわれも汚染や自然破壊を憂えながら，他方では自分自身それに加担していることが少なくない。山岳自動車道に反対しつゝ，自分は高原や高山のドライヴを楽しんでいたりするのである。われわれを殺すつもりか，と抗議しながら，他方では「自殺しようとしている」ことがあるのだ。汚染や自然破壊は人類の自殺行為と言うことができる。

運転手は，彼の弟はもっとひどい自殺行為をしていると言う。彼の弟は，ベトナムの共産主義者たちがアメリカ軍の飛行機から身をかくしにくくするために，植物や木を殺す化学薬品を作っているのである。運転手は，「この頃アメリカ人ができる唯一の仕事は，ある意味で，自殺することであるような気がする」とさえ言う。その上，枯葉剤にせよ，原子爆弾にせよ，その自殺行為的度合が高いほど，それを生み出した科学者の栄誉がたたえられるのである。戦争というものは，それぞれの国の「コマーシャル」によれば，いずれの国にとっても聖戦なのだから。トラウトの GILGONGO という作品は，動植物が増えすぎて困っている惑星の物語である。物語は，パンダ絶滅に生涯を捧げた人物の栄誉をたたえて，祝賀パーティーが開かれているところから始まる。この星では，ほとんど一時間毎に新種の動植物が誕生する。そして，ついに，Passenger pigeon（渡り鳩，北米産，絶滅）とBurmuda Ern（バーミューダうみわし？『朝食』では，バーミューダ諸島だけに繁殖し，絶滅したことになっている）と Whooping cane（アメリカシロツル，北米産，絶滅に近い国際保護鳥）が100フィートもの厚さの living blanket になって，全生物が窒息してしまう。

地球の現状を見ると，地球人はあたかもこの星人のように一生けんめい有毒物を作り，ばらまき，動植物を全滅させようとしているかに見える。地球人は狂って，幻覚の中で地球をこの星と取り違えているのではないか。そうでも考えない限り，地球人の行動は説明できない。そのような奇怪な行動の形成をもたらしたもの，それが「コマーシャル」である。

運転手によれば，湿地帯汚染の源は洗剤類や炭酸飲料類である。洗剤類による汚染と言えば，わが国の中性洗

剤のコマーシャルを思い出す。わが国でも，洗剤類が河川や湖沼汚染の主役の一つであることは現在明らかになっている。しかし，「研究や設備投資にもっとカネを使えば安全度が高く，しかも安い製品を開発していけるのに」ある大手洗剤メーカーの研究費は宣伝広告費の三分の一弱でしかない[15]。企業は「螢光物質」を洗剤に入れたり，どろんこ汚れが真白になる，手がすべすべする，とのみコマーシャルすることによって，汚染とは無関係な洗剤のイメージを形成する努力を払っているかに思える。

汚染は地上だけでなく地下にも及ぶ。ドウェインの義理の兄弟二人が経営する人工のインチキ洞窟の中を流れる地下水流が工業廃棄物で汚染される。泡の壁となって進んで来る廃棄物は怪物のようである。この怪物の正体はプラスチックという重合体で，今やその分子式のように無限にその触手をのばして地球をしっかりつゝんでいるかに見える。兄弟はこれに向ってブローニング・オートマチック・ショットガンで撃つ。すると，水虫の足のようなものすごい悪臭を発し，二人は退散せざるをえない。現代の汚染という強力かついやらしい怪物との戦いにおいて，われわれはこの怪物を退治することは不可能なのではないのか。われわれは刻々退却しつゝあるのではないのか。

(2)　国家に関して

トラウトを乗せたトラックは，やがてウェスト・ヴァジニア州に入る。ここでは，石炭会社が石炭を掘り出すために機械と爆薬を使って地表に穴をあけ，むかしは緑につゝまれていた山々は谷にくずれ込んでいる。この会社は，田園を破壊することを仕事にしているかにみえる。会社は，その採鉱権によって破壊を行なっているのである。法律は，地下埋蔵物の権利所有者がその埋蔵物に達したい時はその権利所有者に地表と埋蔵物の間のものはすべてずたずたに引き裂くことが許されなければならない，としている。埋蔵物の上に農場や森や家を所有する者の権利は，埋蔵物の権利所有者に比してなきに等しい，と老鉱夫は言う。ウエスト・ヴァジニア州の破壊は，このように，法によるもの，すなわち，州政府の行政部，立法部，司法部の承認によるものであること，これが問題なのだ。また，鉱夫たちがかつて会社に自分たちを人間なみに扱わせようとした時も，彼らは，会社の警備員はもちろんだが，州警察や連邦守備隊を相手に戦わなければならなかった。すなわち，自然の破壊にせよ，炭鉱夫という人間の破壊にせよ，公的権力の承認のもとに公然と行なわれたことになる。考えてみると，現代における自然破壊も人間破壊も汚染も，多くのものが不正としてではなく法の下に正当なもの，正義として承認され，行なわれている。しかも，現代においては，立法部も司法部も行政部も，すべてが形式的にせよ国民によって支えられ，コントロールされている民主的なものであり，国民の権利を擁護するものとして正当化され，その巨大かつ強力な諸機構をもって正義を主張し，それを押し進める。ここに矛盾がある。現代国家においては，「広範な大衆が政治の主体として政治過程に参加し，大衆民主化（大衆デモクラシー）が進行する一方で，政治権力が頂点に位する少数の指導者に掌握され，議会民主々義は空洞化して，広範な大衆はその操作対象，政治の客体に転化し，政治的に無力な存在として疎外される[16]」傾向がある。このことをヴォネガットはベトナム戦争ではっきりと自覚した。「この戦争はわれわれがわれわれの政府をある程度コントロールしている，という幻想を奪い去ったのです。われわれは政府に対するコントロールを失ってしまったと思います。一般市民は自分の政府に交渉する道がぜんぜんないということが，ベトナム戦争で明らかになりました。たとえ市民的不服従によっても，大衆デモによってもだめなのです。市民がなにをしようと，政府は反応を示そうとしないのです。それはわれわれの元気をなくさせるような一つの教訓でした[17]」と。「国家は夜警国家のからを脱して強大な権力機能を持ち，政治，経済，軍事機構の緊密な連結，癒着が見られる[18]」。しかし，こうした実態は隠され，権力所有者を中心とする政府によって，国家の正当性はマス・コミその他の全ゆる機会を通じて宣伝され，大衆の方がコントロールされる。これは，実は政界，財界，軍等が一体となった「コマーシャル」ではないのか。

さらに，ここでヴォネガットが指摘するところは，現代国家は，自由や民主々義を誇りその歴史的成立過程を誇る「コマーシャル」の陰で，実は重大な罪悪を行ない，また隠してきた，ということである。このことは現代アメリカ社会のかかえるさまざまな問題へとつながって行く。

アメリカ合衆国の学校では，1492年という年を人類がアメリカ大陸を発見し，合衆国成立の一つの契機となった年として覚えさせる。しかし，事実は，すでに大陸にはなん百万人もの人間が住んでいて，しかも充実した創造性に富む生活が営まれていた。したがって，1492年というのは「海賊ども」が先住者をだまし，殺し，彼らから盗み始めた年にすぎない。世界中の人々にとって自由獲得ののろしとなったあの驚異的な政府は，結果として

は，この海賊どもによってできたことになる。また，新しい政府の創設にもっとも多くかかわった海賊どもは，奴隷所有者だった。例えば「人間の自由に関する世界最大の理論家の一人」であり，独立宣言の起草者，第三代大統領のジェファーソンは150人の奴隷を所有していた。歴史におけるこれらの事実を隠すのは重大な誤りではないのか。過去の正確な記録がないとすれば，われわれが将来重大な過失を避けることを期待できないではないか。ともあれ，自由の国アメリカは，先住民の征服と奴隷制度から出発した。

白人の海賊どもがアメリカ大陸で略奪した先住民はかっ色であったし，大陸へ導入された奴隷は黒かった。「皮ふの色がすべてだった。」海賊たちが先住民たちを一つの人種とみなしたかどうか疑わしい。同じ人間としてよりも，野生動物，あるいはヴォネガットによれば，ロボットにみたてられたのだ。「弾丸は，ずっと遠くからも，がん丈な人間の配線とふいごと鉛管類を破壊することができた。」海賊たちがどれほど残酷でどん欲だったか信じられないほどだった。「白人がインディアン殺戮に用いた残忍な手口は，火あぶり，頭皮はぎ，乳房・耳の切り落とし，幼い子供の虐殺などに代表され，以後の歴史において，アメリカの白人が『劣等民族』とみなす人々に対する暴力行為のパターンを定めた[19]。」こうした事実の認識と，自己批判を経ないことによって，アメリカ人は自由を白人だけに適用し，黒人という「人間を機械として使い，奴隷制度が廃止されてから後でさえも普通の人間を機械と考え続ける」ことになった。ヴォネガットは，とっぴな推測だがと前置きして，南北戦争に勝った北部の白人は不満を残した，それは，もっとも望ましい戦利品である奴隷が手に入らなかったからであり，この欲求不満を勝利者の子孫は受け継いだ，と言う。つまり，北部の人々も南部の人々と，アメリカインディアンや黒人に対する考えは同じだった，と彼は考える。

そして，この流れは1960年代の混乱へとつながって行く。かつてアメリカ大陸で白人海賊がかっ色の先住民を征服し，白人の自由を獲得した歴史をベトナムでくり返したのである。「ベトナム戦争でアメリカ兵士たちが『ベトコン』の耳を切り落として記念品にしたことは，彼らが祖先の行なった蛮行の伝統を継承したにすぎない[20]。」白人のアメリカ人が黄色のベトナム人を征服することによって自分たちの自由を守ろうとしたのである。

アメリカ大陸における黒人は，初めから生きた機械，あるいは動物として，物を持ち上げ，掃除し，料理し，洗たくし，アイロンをかけ，子供のめんどうをみ，ごみを処理する，といったNigger Workをしてきた。しかし，やがて彼らは電気製品という新種の機械にとって代られる。電気製品の出現には，黒人という扱いのやっかいな機械の代替品を見つけたいという白人の夢がこめられているのである。そして，今や白人は，中古車や麻薬や家具を売りつけるギャングどもを除いて，もう黒人をあまり必要としなくなった。しかし，黒人はやはり生まれ続ける。そこで白人はこう考える。役立たずのでっかい黒い動物がいたるところにいるが，多くは性悪(しょうわる)だ，子供を生むことに興味をなくさせておくために，彼らに格安の麻薬を当てがっておくんだ，と。そして，警察は多数の軽機関銃やショットガンを備えて，必ず起こる黒人の季節の始まりを待つのである。9才から孤児院，少年刑務所，監獄と渡り歩いた『朝食』の黒人少年は，生まれてきたのはなにかのまちがいだったと考え，遠くに輝く飛行場の美しい夜景を見ながら，魔法の杖ひとふりで望みが実現するおとぎの国を夢見ることができるだけだ。しかし，現実の世界では，動物や機械の役割をのがれることはできない。

同じ人間である黒人を外見で差別し，固定した機械の役割を負わせるということは，さらに，白人の間でもある外的条件にもとづいて，なんらかの差別を伴う「役割の固定」がなされる可能性を持つ。「独立革命と建国期を担ったことを自負するWASPにとっては，自分たちだけが『真正のアメリカ人』であった。ここから生まれるネイティヴィズムはあとから到着するところの異なった宗教を持つ人々，違った民族に対して，それが白人であるにもかかわらず，暴力を伴った差別と排斥を行う原動力となる[21]。」このような差別の固定化は，すでに地位と富を確保した人々にとって好都合であり，その正当性を主張する「コマーシャル」を必要とする。法と秩序の遵守，生命，自由，財産の擁護など，民主的政治理念の主張がそれに当ることもある。

「ミッドランド市では，だれもが黒人，高校中退の女の子，ポンティアックのディーラー，婦人科医，ガス転換バーナー取りつけ業者，という具合に，明確に限定された演ずべき役割を持っていた。」そして，人々はこの役割の固定化を絶対的真理と信じ込んでしまう。ある人が気が狂ったために期待された役割に反する行動をしたとしても，人々は皆，とにかくその人は役割にそった行動をしているはずだ，と固く想像し続ける。ドウェインの場合のようにだれかが狂っても，ミッドランド市の人々がなかなかそれに気づかないのは主としてそのせいな

のである。「人々の（このような）想像がはずみ車となって，絶対的真理と考えられているがその実はくずれそうな機械を動かしているのだ。」小さい市だから，皆がドウェインのことを全部知っている。彼の経営するハンバーガー店のウェイトレスも，彼のかかえている問題を知っていて，慰めてやりたいと心の中で思う。しかし，彼女は高校中退の女の子でハンバーガー店のウェイトレスという役割から絶対はみ出すことはしない。人々が互いにその役割を離れて心を打ちあけ合えば，ドウェインが後に狂って傷害事件を起こすのを未然に防げたかもしれない。負傷者の中には，彼と全く無関係な者が3名含まれ，突発的な犯罪のようにみえる。現代社会に現われるこの種の事件の被害者たちは，たいてい「なぜ，私が？」となげく。そして，ドウェインの場合と同様，その背景に地縁的あるいは血縁的等の密接な人のつながりの欠如が指摘されることが多い。

しかし，ある役割の中におち込むと，そこから脱出することはかなり困難である。アメリカ人自身あるいはアメリカを目指す人々を現在もとらえているように思われるのが「アメリカの夢」である。だが，現実には，アメリカは乳と蜜の流れる「約束の地」，努力を惜まぬ者に限りない可能性をもたらす「機会の国」ではない。「この町に住む愚鈍で無教育な黒人の麻薬常習者のことを考えている時，どんな人間でもなにか長所があれば必ずもとの素姓以上に出世できるなどと思っている楽天家にでっくわすと，これにはもう泣くか笑うかしかない[22]」とヴォネガットは言う。実は「アメリカの夢」を実現するもっと有効な手段がないわけではない。それは暴力である。しかし，暴力にも縁のない大多数の人々はひたすら自分に与えられた役割を演ずるのみである。しかし，「その代りに内側を美しくするために全力をつくす」人々もある。そのために彼らは麻薬を使うのだ。「その結果はこれまでのところ破局，すなわち，自殺，盗み，狂気等々であった。」

役割の固定化は，政治的あるいは社会的に外部からなされるとともに，人々の内部から彼らの観念や感覚を通してもなされる。このような内部からの固定化を文学や美術が助けている，とヴォネガットは考える。文学や美術にも，彼はさまざまな思想や意図の「コマーシャル」の臭いをかぎ取っているようだ。トラウトはミッドランド市に着き，宿舎で有名な作家（storyteller）ビアトリス・キーズラーと画家のロボ・カラベキアンに会う。登場人物の一人であるヴォネガットは，二人の創作にぜんぜん敬意を払わない，と言う。なぜなら，キーズラーは他の時代遅れの作家と協力し，その作品を通じてこんなことを人々に信じさせようとしている，と考えるからだ。すなわち，「人生には主役とわき役，重要な細部と重要でない細部があり，人生には学ぶべき教訓，通過すべき試練があり，始めと真中と終りがある。」人生とはそういうもので，皆が主役を演ずるわけではない，それぞれ演ずべき役割を与えられている，苦難に会うとすればそれは当然受くべき有益な教訓を学ぶために避けることができないものなのである，そして，君の人生は個人の思い通りに進められるものではなくて，一定の順序で進行するものなのだ，というわけである。そして，人々はそう信じてきたのだ。ヴォネガットは，今まで人々がこんなふうにばかげたことを自分からきめ込んでいるのにだんだん腹が立ってきていた。しかし，考えてみるとそれはむりもないことだ，と思う。それは時代遅れの作家たちのせいなのだ。人々は「物語の中で創作された人物たちと同じに生きようと一生けんめいなのだ。」「なぜ多くのアメリカ人が，自分たちの人生が化粧用ティッシュペーパーと同じく使いすてであるかのように政府によって扱われるのか。それは作家たちが習慣的に自分たちの作り話の中で端役をそう扱うからだ。」そうわかった時点から storytelling を避ける決心をしたのだ，とヴォネガットは言う。実際の人生では，だれ一人として主役と端役の差を持っていない。重要さは皆同じである。すべての事実が同じ重みを持っていて，省いてもよいものは一つもない。人生は，人にしても，生活にしても，時の進行にしても，一定の序列（order）の中にあるのではなく無秩序（chaos）の状態の中にある。時代遅れの作家は chaos を order として書くが，自分はみせかけの order を事実である chaos として作品を書くのだ，と彼は言う。このあたりは，真剣なヴォネガットの表情が目に見えるような気がする。カラベキアンの絵も，キーズラーの小説同様に社会における役割の固定化を助けている。彼の絵というのは，アメリカで1960年代に登場したミニマル・アート（minimal art）に属するもので，緑の壁塗料をぬった縦16フィート，横20フィートの地の左端寄りに，光を反射するオレンジ色の螢光印刷インキの帯が縦のストライプとなっている，ただそれだけのものである。ところが，この絵をミッドランド・バリー・メモリアル・アートセンターの理事長である大富豪が私財5万ドルを投じてセンターの常置コレクション第一号として買い上げたのである。ここで，トラウト作の，国立美術館が買い上げる絵とその値段の決定にルーレットが用いられる惑星の物語が紹介される。貧しい靴なおしが，

生涯でたった一枚の絵を描いた。これがルーレットで選ばれ，10億ドルの値がつき，国立美術館に飾られる。人々は10億ドルの絵を見ようと数マイルの列をつくる。ところが後に，ルーレットが不正にあやつられたことがわかる。この物語の星人同様，ミッドランド市の人々も5万ドルの絵を見に出かけ，心の中で「5才の子供が描いたもっと良い絵を見たことがあるぞ」とつぶやくことになるだろう。しかし，りっぱな美術館に飾られているという現実を前にして，市民たちは，この絵がわからないのは自分がばかだからだ，「正直に働いている者たちには，芸術は必要ないんだ」と自分を納得させるに違いない。そこが金持ちと画家のつけ目なのだ。すなわち，カラベキアンは大富豪たちと組んで，その無意味な絵によって，「貧之人どもに，自分たちがばかであると感じさせるための陰謀」をたくらんだのだ，とヴォネガットは考える。こうして，美術や文学の一部は，政府やこれと手を組んだ財界の「コマーシャル」の成果を助長していることになる。

(3) 性に関して

「コマーシャル」は性に関するわれわれの観念も画一的に固定する。性に関する問題は，ヴォネガットにとってもっとも大きな問題の一つである。彼は，性に関する現代の上品なイメージも「コマーシャル」の結果だと感じている。彼の主な作品には，性や排せつに関する上品でない表現が多く見られ，「私は本のタイトルに fuck という言葉を使った最初の作家だと思う[23]」と述べているほどである。『朝食』の序文で，この本がささげられた婦人について次のように述べている。「彼女は私や彼女の息子に，そして私がガールフレンドをつれて行った時は彼女たちに，ひわいな調子で話したものだった。彼女はおもしろい人だった。私たちは解放された気分になった。彼女は会話の中で，私たちに，セックスに関することについてだけでなく，アメリカの歴史や有名な英雄たち，富の分配，学校，などすべてのことについて，上品にならないように教えてくれた。私は現在，上品にならないことによって生活費をかせいでいるのだ。」

アメリカにおける性については，日本人から見ると非常に開放されている，という印象である。しかし，アメリカにおける1960年代の運動によって起ったもっとも大きな変化は，女性とセックスだ，と言われる[24]ところをみると，アメリカにおいても性の著しい開放は1960年代以降のことなのだろう。しかしまた，Slaughterhouse-Five (1969) は Deep Throat などと同類とみなされ，全国の学校図書館からほうり出されている，とのことで，1960年代以降も，一般市民においては性に関する上品な観念が支配的と考えてもよかろう。

ヴォネガットは，Welcome to the Monkey House で，動物園の猿小屋に道徳を導入しようとした男の話を書いた。男は子供といっしょにイースターに教会へ出かけ，礼拝に感激する。帰りに動物園に行き，猿小屋を見るのだが，そこで一匹の猿が性器をいじっているのを見る。彼はろうばいして，クリスチャン一家が見ても困らないように，猿の発情をおさえる性欲減退剤を開発する。この薬は，やがて人口の増えすぎた人間にも使われ，この薬によって下半身をまひさせ fuck できない状態が上品と考えられるようになる。

またヴォネガットは，Slaughterhouse-Five が学校図書館から拒否されたことについて，「検閲官たちは彼(ヴォネガット)を全能の神という自分たちの観念に敬意を表さない者と考えている。そして，彼らは，神の名声を守るのは政府本来の仕事である，と考えるのだ[25]」と述べている。

すなわち，彼は，性に関する上品な道徳観念は「基本的には形而上学や神学に源を発する観念[26]」であり，これが学校や政府からの「コマーシャル」によって支配的となって行く，と考える。さらにこの上品な観念は，性のありのまゝの姿を隠しているのである。ちょうど，シャンペンの上品さが，実はシャンペンはイースト菌の排せつ物からできていることを思いつかせないのと同様に。そこで，ヴォネガットは，こうした現状を打破して性に関する諸相をありのまゝ飾らずに述べようとする。

『朝食』の登場人物の一人はホモであるが，彼の妻は夫を決して奇形ではないと主張する。そして，夫をホモとして非難している，と彼女が推測するドウェインの方こそ奇形なのだ，と考える。夫と彼女はそれぞれ過去10年間平均して月に36回，87回の orgasm を経験しているのに対し，ドウェインは，推定上 $2^1/_4$ 回しか経験していないから，というのである。そして，ドウェインは性交を大へん恐れていて，その上，性交のことを聞いたこともないような女性と結婚したのだ，とドウェインの上品ぶりを彼女はけいべつする。

ドウェインと彼の女秘書は肉体関係があるのだが，二人の性行為のあとの様子がこんな風に書かれている。

He was lying on his back. His ankles were crossed. His hands were folded behind his head. His great wang lay across his thigh like a salami. It slumbered now.

また，登場する男性たちの penis のサイズが一人一人詳細に紹介される。例えば，一人は長さ $6\,^7/_8$ インチ，

直径 $1^3/_4$ インチであり，世界平均は $5^7/_8$ インチと $1^1/_2$ インチである。

こうなると，上品でないのはもちろんだが，かと言ってわいせつ感も与えないほどである。むしろ，コミックでさえある。

The Sirens of Titan では，タイタン星についたビアトリスは，ウィンストン海のほとりで若い物理学者の彫像を見る。一見すると，実験用ガウンを着た科学者は真理に対する完全な僕(しもべ)以外のなにものでもないようにみえる。試験管にほゝえみかける彼を喜ばせることができるのは真理以外にない，とひとは確信する。人類の野獣的関心からは遠く離れている，と確信させられる。一見，虚栄も欲望もない青年である。しかし，この真理探求者が penis をぐっと勃起させていることに気がつくのである。

ここにもヴォネガットの考えが要約されているように思われる。すなわち，性に関することがらは，美しいもの，りっぱなものを表面にまとってきたが，その野獣性を卒直に認識しよう，と提案しているように思える。Mother Night では，次々に別の女を1晩に7人まですっかり満足させてやると豪語する男について，「わたし」はこう言う。「まったく一みんなこんなふうにして生きようとしているのだ[27]。」まったく，これが現実の一面なのだ。

Slaughterhouse-Five では，ヴォネガットは，性交，強盗，殺人の本をなん百冊もショーウインドーに飾っている店について，「それはおかしな店で，愛と赤ん坊に関するすべてについてを売り物にしていた[28]」と書いている。すなわち，ここで，美しい愛やかわいらしい赤ん坊のかげで，性のテクニックの本やポルノ写真に象徴されるような，性を安っぽい享楽の対象としてそれに熱狂する現代の傾向も生じてきたことが指摘される。これも，街に氾らんする「コマーシャル」に乗って広がりつゝある傾向である。しかし，ヴォネガットはこの傾向も，単に性の開放として拍手を送っているとは思われない。

そもそも，なぜ性が売り物になり，人々が熱狂するのかと彼は考える。トラウトのもっとも売れた本は，売れ行きをよくするために内容とはまったく関係ないポルノ写真入りで，おまけに表紙には WIDE-OPEN BEAVERS INSIDE! と書かれた帯がかけられている。beaver というのは女性の性器をさす陰語である。動物のビーバーの1万倍もありふれたビーバーに対して，なぜ，金 (gold) に対する熱狂と同じような熱狂が生ずるのか。それは形而上的観念によって，その表現や描写が法の下にもっともきびしく制限されてきたからなのである。そして，そのような制限に対する反動としてのポルノに対する熱狂は，自分からばかげたものになろうと熱望することであって，自殺行為であり，少なくとも人生を無意味なものにするのだ。すでに述べたところの，『朝食』がささげられた婦人は，ひわいな調子で話してくれたが，そこには大へんな優美さ (grace) もあった，とヴォネガットは言い，そういうところを自分はずっと真似ようとしている，と述べている。すなわち，「コマーシャル」によるいずれの（上品な，あるいはポルノ調の）画一的に固定された性に関する観念も信じ込まずに，卒直に性のありのまゝの姿を見よう，と主張しているのである。

(4)　フィーリングと統計

「コマーシャル」はさまざまなぎまん的な観念を形成してきた。この形成には，「コマーシャル」がフィーリングや統計的平均を利用する時効果をあげることができるのだ。

トラウトが便乗した，オリーブ運搬の高速トラックには，大きく PYRAMID と書いてある。なぜ，運送会社は，時速100マイルで走る高速トラックに不動の建造物の名をつけたのかとたずねられると，運転手は，お前はばかじゃないかと考えているかのように，言下に，響きがいゝからさ，と答える。コマーシャルにおいては，このように商品や業務の内容と何の関係もないことが現在ではめずらしくないのだ。コマーシャル・ソングは，今や商品名さえもその中に歌い込まないイメ（ージ）・ソン（グ）の時代なのである。商品名やコマーシャルのフィーリングの良さが直ちに商品や企業の信頼性につながるのである。トラウトは，人々が音に魅せられて，言葉が音楽と化してしまう惑星の物語を書いた。この星では，言葉が楽符と化し，文はメロディーと化してしまう。したがって，言葉が情報伝達の手段として役立たない。そこで，言葉が実質的な機能を果たすために官界や財界のリーダー達は新たなみにくい語や構文を常に作り出して，それが音楽にならないようにしなければならなかった。

われわれはよい商品を買っているつもりだが，実はよい音楽やフィーリングを買っているわけで，そこにはみごとなすりかえがある。ヴォネガット自身も，その著書の中でそのようなすりかえが起らないようにしようとする。例えば，先の性の問題についても，性のありのまゝの姿を表わすために，彼は上品な美しい言葉や表現を用いないで，今述べた星のリーダー達のようにむしろみにくい言葉や表現を使って，そのものを卒直に示そうとす

る。

すりかえは他にもある。『朝食』の副題になっているGoodbye, Blue Monday はロボ・マジックという全自動洗たく機のキャッチフレーズである。ゆううつな洗たく日である月曜日よ，この洗たく機を使えばお前とはさよならだ，というわけである。しかし，Blue Monday とは，もともと，日曜日のあとに働きに出かける労働者たちの月曜日の憂うつを表わすものである。月曜日はたしかに伝統的な主婦の洗たく日ではあるが，特に憂うつな日というわけではないし，他の日に洗たくをする主婦もたくさん居るのだ。また，広告板では，マンションを出かけようとする毛皮のコートと真珠を身につけた上流婦人が，「ロボ・マジックがお洗たくしている間にブリッジクラブへおでかけよ。グッドバイ，ブルーマンデー」と言っている。ここでは，Blue Monday についてのすりかえと同時に，毛皮，真珠，マンションをからめた上流婦人のイメージと洗たく機の信頼性とのすりかえがある。

また，トラウトは，コマーシャルの中に統計的平均を用いて，統計的平均と「大多数」をすりかえることがテーマになっている小説を書いた。地球人が，統計を操作してある惑星の人々を意気消沈させ，これに乗じてこの星を占領する物語である。人々は統計的平均とくらべて，自分は大多数よりも勝(まさ)っているとか劣っているとか判断する。したがって，平均値を操作することによって，人々に優越感または劣等感を持たせることができるし，またある命題や商品の信頼感を高めたり失わせたりすることもできる。

このようにして，現代社会ではあらゆる面で「コマーシャル」による上品なイメージや高遠な理念と真実や現実とのすりかえが行われている。

3. 現代社会と自由意志

(1) 自由意志と「コマーシャル」——ロボット化

現代においては，われわれはマス・メディアと各種の巨大な機関や組織にとりかこまれ，これを通じて「コマーシャル」にとりかこまれている。「アメリカにおける放送は，その誕生と発展の段階によく示されているように，その基底にあるものは完全な商業主義[29]」であって，ほとんどすべての放送が「ろくでもないものの売り買いと関係があるのだ。」そして，そのような放送をドウェインらアメリカ人は「子守歌」のように聞いて生活しているのである。登場人物の一人ミロは，トラウトとの会話の中で，数年前に人気のあったテレビショーのせりふを使った。このせりふは，現在放送されていないけれども，ほとんどの人が覚えている。それほど人々の中に深く浸透し，根をおろしているわけである。「アメリカでの多くの会話は，昔も今もテレビショーのせりふで構成されている」と言ってもよいほどなのである。

このような社会では，ひとは自分自身の知能と言葉で人々と交わることが困難な場合が生ずる。ハンバーガー店のウェイトレスは，ミッドランド市のほとんどの婦人同様に高い知能を持っているが，彼女はこれを使わない。故意にばかになろうとしている。他と違う考えは敵を作るからだ。安全に安楽にやっていこうとするつもりなら，できる限り仲間が必要なのだ。彼女は，自分で考え，自由意志を行使することをせずに，機械的に他に同調する，いわば agreeing machine になるように自己訓練しているのである。自分で考えることよりも，他の人がどう考えるかを発見することだけに知能は使われる。そして，発見するとその通りに考えるのである。とすれば，互いによく知っているテレビ，ラジオ，新聞等からの情報，つまり「コマーシャル」通りに考え，語り，行動する，いわばロボットになるのが効率よく agreeing machine になる道であり，安全なやり方というものであろう。

トラウト作の，アインシュタインやシェイクスピアなみの高い知能を持った雌兎の話はこうだ。この兎は，ふつうの雌兎の生活をしていたが，自分の高い知能は兎にとってむだなものであり，一種の腫瘍のようなものであると考え，町へ腫瘍をとり除いてもらいに出かける。しかし，途中で猟師に撃たれてしまう。兎の異常に大きな頭を見て，猟師も兎自身と同じく彼女を病気と思い，この兎をたべるのを止めた方がよいと考える。

こうして，高い知能は現代大衆社会においては無益であり，あるいは死にいたる可能性の大きい危険な一種の脳腫瘍でさえある，と自他共に認められるのである。公害について，戦争について，公的権力について，性について，等々，agreeing machine になるように，すなわち，「心を空白にする[30]」ように自己訓練せずには，安全に安楽に生きて行けない現代の状況が生ずる。それでは，互いに徹底的に同意 (agree) し合い，交わりを深めているかというと，そうでもないのだ。役割の固定化，地縁的あるいは血縁的なつながりの分断傾向の著しい中で，現代人は孤立し，また干渉されるのを嫌う。ドウェインは高級住宅地の大邸宅に一人で住んでいる。家の壁には，月ロケット用に開発された驚異的な隔離材が使わ

れ，彼は外部から完全に隔離されている。しかし，また，近所の人々の目を気にして，自分がGMの車を売っているのにクライスラーの車ででかけようとしていることを彼らに説明しなければならない，と考えるのである。

ハンバーガー店のウェイトレスのように，多少の抵抗は感じても，意識的にためらわず「コマーシャル」を受け入れ，agreeing machine あるいはロボットになる人々もあれば，無意識にそれを信じ，受け入れる人もある。「人間というものはどんなことでも信じることが可能であり，そのような信念を，それがどのような信念であれ，持続するために情熱的に行動することが可能」なのである。

しかし，機械化，ロボット化しきれない人々もいる。ドウェインはそんな一人であろう。彼は，自動車販売店，ハンバーガー店，ドライブインなど経営する大富豪である。大邸宅に彼と犬だけで住んでいる。彼の妻は上品な性知識しかなかったので，現実を知って自殺してしまった。彼の犬は，自動車事故のおかげで尾を振れないため，他の犬に好意を示せない。だからいつでも戦っていなければならない。彼の一人息子は家出をしている。条件反射的に命令に従うロボット集団である軍隊から逃げ出してどや街に住むピアノ弾きである。そして，ドウェインは孤独である。こうして，まず彼の私生活からして，現代社会のかかえる諸問題を彼に投げかける。経営者として，彼は「コマーシャル」を発する側である。しかし，彼は従業員の立場もかなり理解するもっとも良い経営者である。従業員への高給，クリスマスのボーナス，年末の利益配分，従業員のための健康保険の加入，結構な退職規定。その上，従業員の問題にいつも相談にのってくれる。また，だれも黒人を雇わなかった時代に黒人を雇ったこともある。すなわち，「コマーシャル」を受ける側の問題も理解し，したがって自分自身も実は「コマーシャル」を受けていて，同じ問題に直面していることを知る。広く目を見開くと，さまざまな社会問題に気づく。ひどい労働条件の鉱夫たちやアッセンブリーラインについている労働者たち。戦争，自動車事故。彼は，これらの問題を恥ずべきこと，と考える。

こうした現状の中でドウェインに，現代人は機械かロボットではないか，という疑問が生ずる。そもそも，アメリカではその歴史の発端から，人間の機械化，ロボット化が準備されてきた。アメリカインディアンはロボットのように簡単に切り裂かれた。黒人は，洗たく機，農業機械などとして扱われた。この傾向が現代に引き継がれ，現代の「コマーシャル」がその仕上げをした。人々は「コマーシャル」通りに信じ，考え，語り，行動するロボットになった。第二次世界大戦は，「ロボットが役を演じないところがほとんどないようなこっけい劇だった。」アメリカ軍は「コマーシャル」におどらされたロボット軍団だった。ノーマン・メイラーは次のように言う。「あの頃は，日本人は下劣な黄色人だとか，残忍な殺人者だとか鬼畜だとかいう戦時の宣伝をある程度信じこまされていました。終戦後日本にいき，個々の日本人から直接すこしずつ知ったことから，われわれすべてのものと同様，日本人もまた自分で罪を犯すよりも，むしろ罪悪の犠牲にされているのだということが，徐々にわかってくるにつれて，ぼくはあの宣伝が恐るべき欺瞞であり，完全なペテンであったことをはじめて痛烈に理解したのでした[31]。」彼の指摘する通り，日本人もロボット，「米を燃料とする黄色いロボット」だった。この大戦は，自由意志を行使し得る人間からみると，反発を覚えるはずのドラマだった。ロボットでなければ，互いにあのような虐殺を平気でできるはずがない。あるトラウトの物語の主人公もロボットである。「ガソリン兵器は飛行機から人間の上に投下される。ロボットが投下するのである。彼らは良心を持っていないし，地上の人々に何が起っているのかを想像する回路もとりつけられていない。主人公のロボットは人間と似ていて，口をきくことやダンスをすることなどできるし，女の子と出かけることもできる[32]」のだが‥‥。『朝食』にも，ヴェトナム戦争での働きでアメリカ兵として最高栄誉の勲章を受けた男が登場する。アメリカ国民は，彼のロボット的働きに何の疑念も持たないで彼を暖かく迎える。しかし，彼は自分の娘を泣き止まないからという理由で簡単に殺してしまう。まさに彼は殺人ロボットなのである。ミッドランド市が誇りとする，オリンピック女子200メートル平泳ぎ優勝者の少女がいる。彼女の父親は，生後4ケ月の時彼女に泳ぎを教え，3才の時から毎日最低4時間泳がせて彼女を「船外モーター」に変えてしまった。彼女を泳ぐロボットにかえたものは，オリンピックに向けての「コマーシャル」ではないだろうか。

かつて，黒人という肉製機械が，安あがりで確実性があり簡単な家しか要らない金属製機械にとって代られたように，現代の労働者も，本物のロボットや機械が代用できるほどの価値しか持っていないようにみえる。Player Piano においては，機械にとって代られた人々はうさぎほどの価値しかない。また，公害に苦しんでいる現代人を見ると，彼らは，ドウェインがGMの研究所で

見た自動車なみに，機械あるいはロボットとして扱われているようにみえる。ドウェインが DESTRUCTIVE TEST と書かれた建物に入ってみると，そこでは自動車をさまざまな方法で破壊してみて，その耐久性をテストしている。シートのつめ物は燃やされ，風防ガラスにじゃりが投げつけられ，クランクシャフトが折られ，他の車と正面衝突させられ，オイルなしでエンジンが高速回転される，などのすさまじいテストを受けているのである。

『朝食』では，「コマーシャル」の受け手である人々の機械化やロボット化が主として問題となっている。しかし，すでに述べたように，ドウェインのような「コマーシャル」を発する側も受け手と同じ状況を免れないだろう。現代においてはだれ一人として「コマーシャル」の支配を受けないわけにはいかない。互いに，だれかの発する「コマーシャル」に支配されている。そのことをヴォネガットは The Sirens of Titan で暗示しているように思われる。火星陸軍では，自意志を行使できると思われる司令官たちが，隠し持っている制御盤で軍人たちをコントロールしている。しかし，司令官たちでさえも，実は，どこからともなく流される情報にもとづいて行動し，また，この情報源であり，火星上のあらゆるものの総司令官であり，完全な自由意志を持つただ一人であると自ら思っていたラムファードでさえ，実は，高度の機械（ロボット）であるトラルファマドール星人にあやつられているのである。しかし，このロボットも機械以上のものになろうとすると分解してしまうねっからのロボットなのである。

「コマーシャル」によって国中が戦争の方向に突進している場合のように，社会全体がロボット化の方向に進んでいる中で，自由意志を行使し，その方向を指摘し，危険を説いたりすれば，その社会のメンバーとは認められず，その言葉は理解されず，ふざけているとしか受け取られないかもしれない。それは死を意味することさえある。したがって，ロボット化は極限まで進行する。トラウトがえがく悲劇的な伝達失敗の物語はこうだ。空飛ぶ円板に乗って地球に到着した生物 Zog は，戦争の防止法とがん（cancer，社会的積弊の意味もある）の治療法を伝えるため Margo という惑星からやってきた。この星人はおならとタップダンスで会話するのである。彼が夜中にコネチカット州に着くとすぐに，一軒の家が火事になっているのを見つける。彼はその家へ走って行き，おならとタップダンスで家人に恐ろしい危険を警告する。しかし，その家の主人は彼の脳天をゴルフのクラブで打ちくだいてしまう。

(2) ロボット化と自由意志——狂気

周囲の人々がすべてロボットとみえる中で，おそらく，ドウェインは，自分だけは自由意志を行使したいものだと思う。自分もロボットであれば，ただ「コマーシャル」のまゝに流され，公害も気にしないでいればよい。しかし，ただ自分一人だけ自由意志を行使するとなれば Zog の二の舞いになりかねない，と思う。しかし，また，ロボットにはなりたくないのだ。「コマーシャル」攻勢はいよいよ激しく，GM の耐久テストのような試練も激しい。心理的な圧迫が重なる。自由意志などすてたらどんなに楽かと思う。ドウェインのそうした思いは，時々，反響様言語模倣症（Echolalia）という精神分裂症の症状（自由意志によって他者の言動を取捨選択することができず，それを自動的に受け入れてしまう現象の一つで，患者は他者の言語や文章をおうむ返しに真似る）となって現われる。状況は，自由意志を行使しようとする者にとって絶望的な様相をみせている。トラウトはむかし自然保護論者だった。ヘリコプターから自動鳥銃で bald eagles（白頭わし，米国の国章であるのが象徴的）が撃たれることを泣き悲しんだものだが，今はもうあきらめの境地だ。タンカーが海に積荷をすて，なん百万もの鳥やなん十億もの魚を殺しても，がんばれ，スタンダードオイル！などと言うようになった。皆が，あきらめているか，やけになるかで，受動的に流されロボット化して行く。「あらゆることが一つ残らず想像を絶するほど悪くなって行き，再びよくなることは絶対にないだろう[33]」というほど絶望的にみえる。ドウェインの狂気は進行する。だれか手を引いて導いてくれる人が必要だ。どうしたらよいのか答えてほしい，と彼は思う。ミッドランド市の人々の言ったこと，あるいはこれから言いそうな通り一遍のことは聞いてしまったし，他の市の人々の言うことも同じことだ。火星人にでも新しいことをききたいものだ，と思ったりする。キリスト教はどうか。キリスト教の神もドウェンの助けにはならない。神は天地万物とその運動を支配している。例えば，火山の爆発などの天変地異，50年毎の氷河期，にれの立枯れ病など，みな神の手配したものだ。とすると，神は自然保護論者ではない。したがって，自然保護論者となることは神の神聖をけがすことになるわけだ。では芸術祭に集まる芸術家たちはどうか。彼らはまったく新しい観点を与えてくれるにちがいない，とドウェインは期待する。しかし，これはひどいまちがいだった。

ドウェインはミッドランド市でトラウトと出会う。ド

ウェインは強い期待をこめてトラウトに，人生の秘密を解きあかし，自分のかかえている問題の解決のかぎを与えてくれと頼む。ドウェインにせつつかれてトラウトは手に持っていた自分の著書を渡す。この本の中でトラウトは，一般の読者に宛てて，君は自由意志を持っているただ一人の人間だ，と書いた。ところが，ドウェインはこれを自分だけに宛てたものと考えた。ドウェインだけが自由意志を持ち，考え，感じ，心配し，計画をたて，などしている。これに対し，地球上の他のすべての者が全自動機械のロボットであり，苦痛とはどんなものか知らないし，物ごとを選択できない。したがって，彼らは公害をはじめ現代社会の諸問題に会ってもなんの苦痛も感じない。また，「コマーシャル」にあやつられて，自ら公害などの加害者の側にもまわっているのである。トラウトの本によれば，人生は宇宙の創造者の実験である。ロボットたちによって地球が毒まみれのただれたチーズと化したのは，創造者がドウェインをテストするためなのだ。このテストを切り抜ければ真に自由な新しい星へ導かれる，とこの本は約束する。人間が機械あるいはロボットではないかというドウェインの予測は当った。しかし，このテストを切り抜けるための肝心の方法は示されていない。これまで時々現われた狂気はついにその極に達する。彼は，テストに加わったロボットたちを手近かなところから打ちこわそうとする。彼は多くの人々を傷つけ，ついに警官に捕えられ，狂人拘束衣で包まれて被害者といっしょに救急車で病院へ運ばれる。しかし，彼は狂気の中で，自分はついに約束の新しい星へ来たと思い込んでいる。この星では，宇宙の創造者でさえ彼をぜんぜんコントロールしていない。したがって，ここでは彼はまったく自由意志で行動できる。彼は毎日つめたい水で泳いだ後に必ずなにか叫ぶのだが，どんなことを叫ぶかは創造者さえ予想がつかないほどだ。彼は救急車の中で叫ぶ。"Goodbye, Blue Monday!" また，別の日のつもりで叫ぶ。"Not a cough in a carload!" (たばこのコマーシャル) また次々に叫ぶ，"A slip of the lip can sink a ship!" (不明) "Rember Pearl Harbor!" "Wouldn't you really rather drive a Buick?" (Buick のコマーシャル) 彼は，夢の中の星の上で，ヴォネガット同様に，地球上の「コマーシャル」をすっかり振りすててしまおうとしているのではないだろうか。

(3) 展望

こうして，ドウェインの自由意志は狂気の夢の中でしか行使することができなかった。正気に戻ったとしても，彼は被害者たちから告訴され，賠償金を取られ，ミッドランド市のどや街で貧乏なしぼんだ風船みたいな老浮浪者の役割を死ぬまで演ずることになるだろう。彼は挫折した。しかし，彼の置かれたような現代の悲観的状態を打開する道はないのか。現代においては，われわれは「コマーシャル」の中で生活しないわけにはいかないのだが，これにすっかり引きまわされない道はないのだろうか。

ヴォネガットは，それは「工場システムによってずたずたにされた[34]」共同社会 (community) を復活することだ，と考えているようである。それは彼のユートピアであり，小さな夢であって，実際やってみればうまくいかないかもしれないが，こんな明るい小さな夢でもないと「私自身の悲観主義を切り抜けて生き残ることはできないだろう[35]」と言う。彼は，共同社会に近い存在として，会員が同じ破滅的な体験を持ち，血縁関係に近い拡大家族を与える Alcoholics Anoymous (アルコール中毒者自主治療協会，アルコール中毒患者たちがみずから立ち直るのを助ける目的で結成されたアメリカの全国的組織) とか，ある炭鉱労働者たちが自分たちの職場が消滅しそうであるにもかかわらず工業の盛んなサンディエゴなどへ出て行かずにとどまっている，教会を中心としたある地域，などをあげている。すなわち，必ずしも血縁にこだわらず，その代りになんらかの共通項，例えば共通の関心，目的，価値，ライフスタイル等を持った者同志が構成する拡大家族である。

現代社会では，われわれは孤独であり，「もはや充分な数の友人や親族を持っていない[36]。」ドウェインの狂気も，そのような状況の中で極に達した。助けを求める彼の心からの叫びにだれも答えることができなかった。こうした悲劇を経験して，現代は，例えばコンミューンのような形で，共同社会の再建を試みる時代である。しかし，「人々はもはや永久的に共同社会のなかで暮すことはできない[37]。」なぜなら，共同社会分断を含む現代社会的諸病弊の源たる現代機械文明の徹底的批判と超克の試みが，われわれに欠けているからである，とヴォネガットは考えているようにみえる。Player Piano では，機械文明に疎外された民衆が暴動を起こし，機械類を破壊する。しかし，そのラストシーンでは，人々はその破壊直後に，破壊された機械の部品を集めて自動機械を作り始める。彼らは「同じ古い悪夢を再生しようともういっしょうけんめいになっている[38]」のだ。そこには，病弊をじっくり考えようという意欲はまったくなさそうにみえる。また，西暦2158年に設定されたヴォネガットの短編の中で，ニュース解説者がある学者の講演の要旨

をこう伝える。「現代世界の病弊のほとんどは，人類の自分自身に関する知識が物質世界に関する知識についていかなかったという事実に，その源をたどることができる[39]。」すると，不老薬のおかげで172才になる老人は言う。「なに言ってるんだ，そんなことは100年前に言われとった[40]。」ニュース解説者の伝える講演の要旨は，現代社会における多くの人々の発言の要旨でもある。しかし，これは100年はおろか200年経ても生かされないだろう，とヴォネガットは予言しているように思われる。『朝食』の最後はハッピーエンドではない。ドウェインは発狂し，作者から解放されたトラウトの足もとも心もとない。ヴォネガットの目にも涙が見える。

註

1) Kurt Vonnegut, Jr., Mother Night (Dell, 1974), p. 24.
2) Kurt Vonnegut, Jr., Cat's Cradle (Dell, 1970), p. 27.
3) Kurt Vonnegut, Jr., God Bless You, Mr. Rosewater (Dell, 1970), p. 18.
4) 大江健三郎『状況へ』(岩波書店，1974)，p. 167.
5) 池澤夏樹「現代アメリカのナイーヴな啓示」(『海』1月号，中央公論社，1975)，p. 258.
6) Kurt Vonnegut, Jr., Slaughterhouse-Five (Dell, 1971), p. 101,
7) Kurt Vonnegut, Jr., Wampeters, Forma & Granfalloons (Dell, 1976), p. 280.
8) Ibid., p. 281.
9) 下中邦彦 (編)，『哲学事典』(平凡社，1971)，p. 1239.
10) Wampeters, p. 283.
11) Ibid., p. 276.
12) Ibid., p. 276.
13) Ibid., p. 282.
14) Ibid., p. 266.
15) 朝日新聞，1980. 8. 4.
16) 『哲学事典』，p. 451.
17) Wampeters, p. 271.
18) 『哲学事典』，p. 451.
19) 大橋健三郎 (編)『総合研究アメリカ⑥-思想と文化』(研究社，1976)，p. 210.
20) Ibid., p. 210.
21) Ibid., pp. 213–214.
22) Wampeters, p. 258.
23) Kurt Vonnegut, Jr., The Art of Fiction (Interview) (The Paris Review, Spring 1977), p. 100.
24) 朝日新聞，1977. 6. 13.
25) The Art of Fiction, p. 89.
26) Jerome Klinkowitz & Donald L. Lawler, Vonnegut in America (Dell, 1977), p. 189.
27) Mother Night, p. 108.
28) Slaughterhouse-Five, p. 203.
29) 本居長世 (編)，『講座アメリカの文化 6 今日のアメリカ』(南雲堂，1970)，p. 241.
30) Kurt Vonnegut, Jr., The Sirens of Titan (Dell, 1959), p. 115.
31) ノーマン・メイラー (山西英一訳)，『裸者と死者(上)』(新潮社，1960)，p. 577.
32) Slaughterhouse-Five, p. 168.
33) Wampeters, p. 162.
34) Ibid., p. 241.
35) Ibid., p. 243.
36) Ibid., p. 242.
37) Ibid., p. 241.
38) Kurt Vonnegut, Jr., Player Piano (Dell, 1974), p. 320.
39) Kurt Vonnegut, Jr., Welcome to the Monkey House (Dell, 1970), p. 298.
40) Ibid., p. 298.

その他の全引用文 Kurt Vonnegut, Jr., Breakfast of Champions (Dell, 1975)

参考文献

I. ヴォネガットの作品
1) Kurt Vonnegut, Jr., Happy Birthday, Wanda June (Delacorte, 1970)
2) Kurt Vonnegut, Jr., Slapstick or Lonesome No More! (Panther Books, 1977)

II. 批評書その他
1) Jerome Klinkowitz & John Somer, The Vonnegut Statement (Delacorte, 1973)
2) Clark Meyo, Kurt Vonnegut: the gospel from outer space (The Borgo Press, 1977)
3) Ricard Giannone, Vonnegut: A Preface to His Novels (Kennikat Press, 1977)
4) Peter J. Reed, Kurt Vonnegut, Jr. (Crowell, 1972)
5) David H. Goldsmith, Kurt Vonnegut: Fantasist of Fire and Ice (Bowling Green University Popular Press, 1972)
6) 岩元 巌『現代のアメリカの小説』(英潮社，1974)
7) レイモンド・M・オールダマン (鈴木道雄訳)『荒地の彼方』(評論社，1976)
8) イーハブ・ハッサン (待鳥又喜外訳)『現代アメリカ文学序説』(北星堂書店，1976)
9) アルフレッド・ケイズィン (佐伯彰一外訳)『アメリカ小説の現貌』(文理，1974)
10) 津田義夫「カート・ヴォネガット・ジュニア——ドレスデンから三十年」(不死鳥 No. 38，南雲堂，1974)
11) 樺俊雄『社会学用語解説』(東洋経済新報，1966)